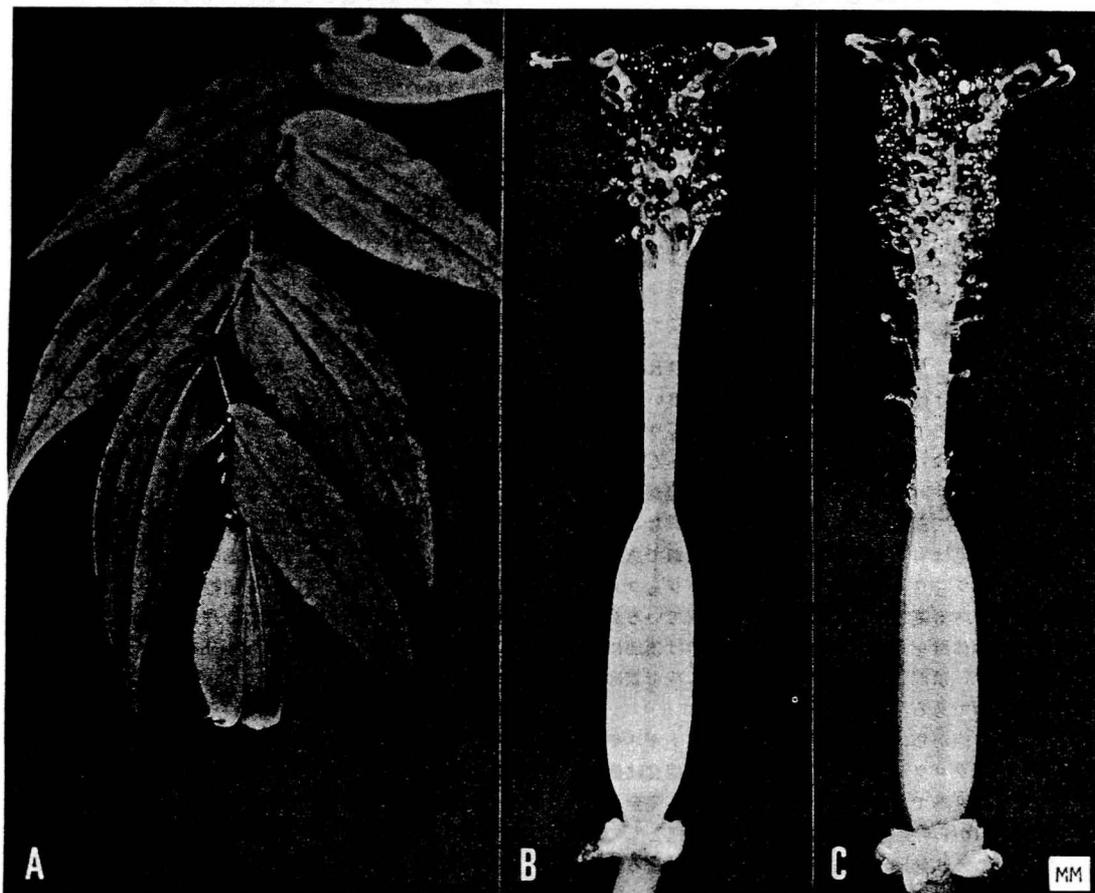


FLORA KANAGAWA

神奈川県植物誌調査会ニュース 第5号 NOV. 10. 1980

231 横浜市中区南仲通り5-60 神奈川県立博物館内
神奈川県植物誌調査会(振替口座 横浜 10195)
TEL 045-201-0926

No. 5



○サガミシヨウロウホトトギス

神奈川県の植物相は他の府県にくらべて豊富な方になるかと考えられますが、神奈川県特産の植物となると現在の所、サガミシヨウロウホトトギスしか頭に思い浮かびません。サガミシヨウロウホトトギスは1960年に始めて学界に紹介されたニューフェイスです。シヨウロウホトトギス類は高知県と宮崎県(?)に分布するシヨウロウホトトギス(トサシヨウロウホトトギス)、紀伊半島にあるキイシヨウロウホトトギスが古くから知られていましたがサガミシヨウロウホトトギスが第3の種となったわけです。その後静岡県毛無山から

スルガシヨウロウホトトギスが発見され、これは愛鷹山にも分布するようです。本会会員の岩田実さんは最近これを赤石山系前衛の篠井山の一角から発見されました。どの種類も数が少なく、保護に充分意を用いるべきだと思います。サガミシヨウロウホトトギスとスルガシヨウロウホトトギスは極く近似したものですが、従来の区別点のほかに、スルガシヨウロウホトトギスは花柱の下部まで腺毛があるのに対し、サガミシヨウロウホトトギスの花柱の下半部は無毛のようです。写真のAは自生地におけるサガミシヨウロウホトトギス、BとCは雌蕊で、Bはサガミシヨウロウホトトギス、Cはスルガシヨウロウホトトギスです。(大場 達之)

丹沢山塊深谷産の ジョウロウホトトギスについて

丹沢に産するジョウロウホトトギスといえばサガミジョウロウホトトギスに違いないと思うのが普通であろう。その記相文を読めば近似種のスルガジョウロウホトトギスとの相違も明らかのように思われる。しかし、今回の観察でこれらの種に関する形質把握は十分なものではないかと思わざるを得なくなった。

I 主な観察点 (測定2株)

- ①茎長80cmに達す ②葉大16cm × 3.5cm
- ③葉裏中肋微毛 ④花序有毛
- ⑤茎頂4花, 頂部より7節葉腋1~2花, 8節葉腋1花, 9節葉腋1花。
- ⑥花42mm~45mm, 距4~5mm
- ⑦茎頂花序部苞12~15mm, 7節葉腋以下の花柄苞7~10mm ⑧葯赤紫色

II 観察要約

- ①発育の良い個体ではかなり大きい。
- ②花は茎頂だけでなく葉腋にも着く。
- ③葉裏中肋の毛は微毛疎生でルーベ観察を要する。
- ④距は測定がむづかしいが少なくとも3.5mm以上
- ⑤苞は大きく顕著
- ⑥葯はアズキ色

III 考察

スルガジョウロウホトトギスの特徴とされている葯の赤紫色は他の近似種の黄色に対して良い区別点と思われるのでこの観察個体はスルガジョウロウホトトギスではないかとも考えられる。しかし同種の他の特徴とされている距が小さいことや苞が小さいことについて観察個体はむしろ大きい点異なる。葉裏中肋の毛は有毛というには余りに微且疎である。

サガミジョウロウホトトギスもスルガジョウロウホトトギスも茎頂だけに花が着くとされているがこの観察個体群を見る限り発育の良いものは頂部に数花を着け、頂部より数節休んで葉にも花を着けるのが常態である。

以上の点から、サガミジョウロウホトトギスやスルガジョウロウホトトギスについての記相文は個体の記録の段階であって種の記載としては不完全なようであるから今回の観察個体を何れかの種として同定することは無理があるのではないかと考える。観察地は険しい深谷で周辺の谷には分布が無い。状況からみて雑種ではあり得ない。観察については丹沢登山家奥野幸道氏の助力に頼った。(城川四郎)

茅ヶ崎のイケイキュウカ

最近永年の懸案であった日中国交が回復し、両国の関係は緊密になってきている。

植物の領域でも日中両国は同一区系に属し従って共通種も多いが、一方文化的にも両国は古来密接な関係を保ち、わが国は農耕、園芸方面でも深い影響を受けてきた。

孔子も詩に詠んだことのある王者の花—蘭—は両国

の文人墨客に特に珍重されてきたが、唐宋文化と共に中国産蘭がわが国に渡来し、鎌倉、足利時代には素心蘭や報歳蘭が将来されている。

降って徳川時代特に享保、天明の頃には東洋蘭の栽培が非常に流行し素心蘭、玉花蘭が輸入された。また、今日わが国で栽培されている一茎九花の銘品中には江戸時代に中国で作出されたものが多い。

さて1951年4月茅ヶ崎植物会の観察会の折、茅ヶ崎市甘沼の女子美術大学構内の雑木林で会員の田中明子さんは正体不明の蘭を1株採集され私に鑑定を求められた。この南面する雑木林にはウヰミズザクラ、ウグイスカグラ、シュンラン、エビネなどが生育していた。

田中さんの庭に栽培しておいたものが翌年4月下旬に開花し、5月初旬、市文化資料館での植物会の勉強会に持参されカンランではないかと申されていた。この株は会員の阪田敏子さんが撮影された。

しかし、カンランの花期は12-1月であり、また花被片は広線形で一致せず、スルガランは花期が6月上旬から10月中旬までで、葉と花茎が略同長で、花被片の基部に暗紫色の条線が現われ、また花下の苞葉が短かく目立たない点などで甘沼のランとは異なっていた。

1953年5月3日、田中さんから開花のお知らせを戴きカメラを持参して撮影した。この写真を二三の専門家に送り鑑定をお願いしたが、スルガランとする意見が多かった。それで茅ヶ崎植物目録資料(1978)ではこの意見に従っていた。

田中さん宅にお伺いした際付近の丘陵で採集された蔓性植物の同定を求められた。調べてみるとそれはツルニチソウであったのでこの付近の山には相当栽培植物が逸出している可能性が強いことが判明した。

それで甘沼のランも東洋蘭の逸出種であるとの推察も可能となったので、中国高等植物図鑑V(1976)のシュンラン属の所を開き4-5月に開花する種を捜してみるとイケイキュウカ(Cymbidium faberi Rolfe)が見つかった。

先年神奈川県教育センターで台湾大学の許建昌教授のイネ科に関する講習会の折、同教授はラン科植物では唇弁の形質が重要であると申されていた。甘沼のランは唇弁の舌の部分の上面に乳状毛があり、縁辺が皺曲していることなどイケイキュウカの特徴と合致していた。

それから暫らく市文化資料館で催された特別展「茅ヶ崎の植物」の準備に忙殺されこの問題から遠ざかっていた。

一方当会の谷本交平氏は甘沼のランをスルガランとすることに疑義を示されイケイキュウカではないかと申されていた。

普通書店の棚にならんでいる東洋蘭の本には一茎九花の梅弁、荷花卉、水仙弁品など園芸家が改良したものが多く掲載されていて、返って並物の写真が少ないので特別展が終了した日に、東洋蘭連合会の黒崎陽人先生の著書を購入して検討してみた。同書中の一茎九花の並物の写真は甘沼のランと良く似ていた。

それで前記の写真を黒崎先生に送り鑑定をお願いし

た。先生は「……おおせの通り写真のランは一茎九花の普品です。九花は小生も庭に地植えにして楽しんでいます、小宅のものよりもよい型に咲いていますが、良いものを見せて戴きました。又これは並物ではありませんが、とても性の良い花です。大切に御愛育をねがいます」との返信をよせられた。また黒崎先生のお話では以前千葉県でもこのランが逸出状態で見付かっているとのことである。

これは一茎九花の極めて微細な種子が中国大陸から季節風により飛来した結果であると説明する向きもある。しかし甘沼のランは当時生育地の下方に温室跡も残っていたので恐らくはそこで栽培されていたものが逸出したのであろう。

なお、牧野博士はこの一茎九花に *Cymbidium scabroserrulatum* Makino という新学名を与えられている。

田中さんの庭のイケイキユウカは毎年花茎を一本ずつ殖やして今も健在である。

このような貴重な植物を保存栽培する施設がほしいものである。

本年(1980)鑿真大和上(688-763)の脱乾漆像が1200余年振りに里帰りし中国各地で公開されている。鑿真や彼を招請した栄叡を取扱った井上靖著「天平の甕」も映画化された。

五度の失敗、失明など多くの困難を乗り越えて遣唐副使大伴古麻呂の船で鹿児島に来航した鑿真は東大寺の戒壇の建立、唐招提寺の開基などが国の仏教の振興に努める一方書道、彫刻などにも深い影響を与えたが、また医薬にも長じ、正倉院の薬物を整理していて、謂わばわが国の植物学の源流である本草学の開基者の一人でもある。

わが国の本草学の進歩にも功績のあった鑿真像が里帰りした年に茅ヶ崎で中国産蘭「一茎九花」が逸出状態で生育することが確認されたことは興味深い。

文 献

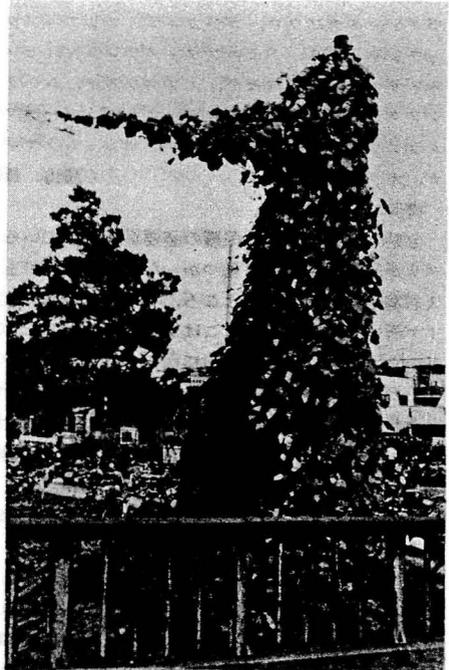
1. 増補版 牧野日本植物図鑑 北隆館 1958
2. 前川文夫 原色日本のラン 誠文堂新光社 1974
3. 北村四郎他 原色日本植物図鑑 草本編 Ⅱ 単子葉類 保育社 1975
4. 黒崎陽人 増補 東洋ラン 花物 誠文堂新光社 1976
5. 中国高等植物図鑑 第5冊 科学出版社 北京 1976
6. 平凡社版 寺崎日本植物図鑑 1977

本編は「はまかきらん—茅ヶ崎植物会会報」第4号1979年に発表したものを一部加筆して転載したものである。(小原 敬)

おう盛な繁殖力をみせるアレチウリ

標本作成のため分担の戸塚地区を、機会を見ては歩いているが、横須賀線の戸塚駅から大船駅へ続く柏尾川沿いの道にはいろいろな帰化植物が見られてたいへん興味深い。

ことしの8月と9月に歩いたおりに、キクイモ、セイパンモロコシ、ワルナスビ、ビロードモウズイカ、



アレチマツヨイグサ、ツルドクダミ、ブタクサ、セイタカアワダチソウなどが見られたが、なかでも広い面積をおおって広がるアレチウリ、*Sicyos angulatus* のおう盛な繁殖ぶりは目をみはるばかり。

アレチウリが最初に採られた記録は昭和27年、静岡県清水港(植物採集ニュース12号)であるが、いまでは神奈川県内でも、丹沢の水無川の川原、川崎の民家園、南部線沿線などいたるところで見られるようになった。

写真は戸塚駅近くでとったもの、土手をおおい、ソメイヨシノによじのぼり、果ては電柱まで駆けあがって、さながらアレチウリ全盛時代を誇示するような怪異な姿が印象的である。前に人間を襲う怪奇植物を主題にした洋画があったが、この姿をみていると、いまにも動きだしそうで、怖かった映画のシーンを思いだす。(林 辰雄)

横浜北・川崎ブロックから

去る9月22日鶴見高校で、各地区担当者が集まり、標本整理と採集リスト作りが行なわれた。その結果、930種、2700枚の標本が集まった。特に目立ったものはないが、横浜・川崎で比較的珍しい植物には、次のようなものがあった。

ミズニラ、ヤジャゼンマイ、ミヤマシケンダ、オンダ、イワヘゴ、タニヘゴ、イノデモドキ、ツヤナンイノデ、クジャクシダ、クサソテツ、キヨタキシダ、イワガネゼンマイ、ハネガヤ、キダチノネズミガヤ、イヌアワ、オオアブラスキ、ササクサ、カタクリ、ユキザサ、チゴユリ、ワニグチソウ、クモキリソウ、トンボソウ、ヤシヤブシ、ツノハンバミ、ムカゴイラクサ、タマノカンアオイ、ワダソウ、ユリワサビ、ミヤマネコノメソウ、ヤマネコノメソウ、シモツケ、イヌ

ザクラ、タチフウロ、カジカエデ、ツリフネソウ、ギョウジャノミズ、トモエソウ、クサレダマ、センブリ、スズサイコ、ヒキヨモギ、ミゾホウズキ、ムシクサ、シツクサ、ソバナ、キキョウ、オクモミジハグマ、タムラソウ、タカアザミ、ミヤコアザミ、ムラサキニガナ、オグルマ。(勝山 輝男)

横浜のカタクリ

全県的に数が減り、保護の必要が叫ばれているカタクリが緑区長津田町で見つかった。緑区担当の上田泰久君案内で見に行つたところ、2ヶ所で確認できた。1ヶ所はスギ樹林下、こは堀り採られたりして荒れていた。もう1ヶ所は水田に面した北向急斜面で、こちらは人が近づきにくい地形でもあり、荒らされた跡もなく開花株数も多く見事であった。どちらもけっして大きな群落ではないが横浜最後のカタクリ群落かもしれない。なんとか保護したいものである。

(勝山 輝男)

マルバフジバカマ

北米原産の帰化植物。箱根の強羅に帰化していることは古くから知られていたが、横浜市にも帰化している。出口長男氏が横浜植物誌に旭区上川井町で採集したと書いている。上川井の株がどうなったかわからないが、隣接する緑区三保町の2地点で生育しているのを再発見した。出口氏が発見してから27年たった現在でも健在である。長田武正著、日本帰化植物図鑑(北隆館)P22に鶴見で採集されたとするのは、旭区上川井町の誤りであろう。

(勝山 輝男)

三浦地区から

三浦地区はそれぞれのメッシュを2~3人で分担して調査を進めているが、二十年ほど前には確かにあった植物が、すっかり影をひそめてしまったり、昔はなかったが、最近急激にふえてきた帰化植物があったりで、非喜こもごもといったところである。

三浦半島から姿を消したと思われる植物は久里浜のハマビシ、ヒシ、クログワイ、カキランなどがあげられます。地域の開発・埋立工事などでいためつけられ環境が変わったためと思われる。

近年になって姿を消してしまい、ほとんど見られなくなったものにセッコク、カヤラン、ナギラン、キンラン、ギンランなどのラン科植物のほか、キツネノカミソリ、センブリ、オミナエシ、キキョウなどがある。

目下絶滅しかかっているものに、毘沙門のミズキンバイがある。自生地が耕地整理にかかるということで、三浦市の自然保護委員の鈴木一喜さんがその存続に骨をおっておられるという状況である。

アマクサシダ、オオバノハチジョウシダも上山口や久里浜にあったが、ゴルフ場の造成のため埋められたり、工場建設の用地になったり、わずかに余命を保っているに過ぎない。

平作川の川口や毘沙門の海岸にウラギクがあったが、河川改修工事や台風の影響で、なくなってしまったのではないかと心配である。

自然の力はおそろしいもので、昨年秋の台風で、半

島の海岸植物は泥砂とともにすっかり洗い流されてしまい、基底の岩盤だけになってしまったところが多い。毘沙門・松輪の海岸は被害甚大で、もとの姿にかえるのはいつのことであろうか。

近年帰化植物が急激にふえてきた。長浦港・横須賀港をはじめ米軍基地との関連で、物資の陸あげ移動につれて、いろいろ帰化植物が入っているようで、今後の調査にまつところ大である。(石渡 治一)

湘南ブロック茅ヶ崎市・寒川町から

その後の調査でこの地域内に新たに生育が確認された植物は以下の如くである。

オンダ、ジュウモンジシダ、ホウキギ、クロモジ、ハンショウズル、ヤマネコノメソウ、アカバナ、アシタバ、セントウソウ、ハリアサガオ、アブノメ、ムシクサ (小原 敬)

横浜南ブロックから

最近ようやくセイタカアワダチソウの黄色色がここで見つようになった。こうした帰化植物は私の担当の西区、港南区いたるところで目につくが、セイタカアワダチソウの分布がやゝ頭打ちなのにくらべ、アレチウリの繁殖ぶりがすさまじい。西区の堀割りのような帷子川のへりはいわずもがな、私の家の近くの永谷川の岸辺が、こゝ2・3年の間に鶴見川べりのようにアレチウリでおゝわれ始めた。野庭公園はオオブタクサの繁茂ぶりが著しい。ものすごい刺をもつアメリカオニアザミも、港南区内で点々と見かけるが、大きくならないうちに摘みとられてしまうようだ。

初夏、西区の久保山墓地を歩くと、いたるところでキキョウソウの美しい紫色の小花にぶつかると。他地区ではこれほどの数は見られまい。珍しいことだ。珍しいといえば、私の勤務する学校の花壇に、今年ツボミオオバコが数十株生えた。どうして急にこんなところへ出現したのかかわからない。誰かが種子をまいたのだろうか。

港南区芹ヶ谷にビロウドモウズイカの群落が大分以前からあった。今年標本にせねばと出かけてみたら、ブルドーザーの下敷きになっていた。地下鉄上永谷駅の近くでムシトリマンテマを数株みつけた。標本にとって数日後、その付近はきれいにならされてしまった。こちらは何か間があったようだ。

上大岡付近の京浜急行の土手には、牧草がかなり生えている。カモガヤ(オチャードグラス)、オオアワガエリ(チモシー)、オニウシノケグサ(トールフェスク)。最近この群落の中にシラゲガヤ(ヨークシャーホグ)を見つけた。セイバンモロコシ(ジョンソングラス)も高く伸び、電車を気にしながらの土手歩きもしている。(村上 司郎)

県北地区合同調査の記録

県北地区植物合同調査会は、8月17日に津久井郡津久井町の青野原神社に9時に集合し、焼山(1059.6m)からキビガラ山の手前で青根の平丸に下るコースで行なわれた。現地案内指導は県北支部の城川や高橋があたり、参加者は県下各地より、8名の勇者が集まった。途中どしゃぶりの雨に会ったにもかかわらず、計画は予定通り行なわれ約465種の植物を観察した。このリストは高橋節郎の記録によるが、一部は当日参加された長谷川義人氏の記録で補われている。またこのリストは県北担当者によって同じコースで春に調査したものも含まれている。

羊歯植物

トクサ科 — スギナ。

ゼンマイ科 — ゼンマイ。

イノモトソウ科 — イヌシダ、ワラビ、タチシノブ、ハコネシダ、クジャクシダ。

オシダ科 — クサソテツ、イヌガンソク、コウヤワラビ、ジュウモンシダ、ヤブソテツ、ヤマイタチシダ、ゲジゲジシダ、ミゾシダ、ヤマイヌワラビ、キョウタキシダ、ミヤマシケンシダ、ミサキカダマ、ヒメイタチシダ、オオイタチシダ、ヘビノネゴザ、イヌワラビ、ヒメワラビ、シシガシラ、ハリガネワラビ。

ウラボシ科 — ノキシノブ、ヒメノキシノブ。

裸子植物

イチイ科 — カヤ。

イヌガヤ科 — イヌガヤ。

マツ科 — アカマツ、モミ。

スギ科 — スギ(植栽)。

ヒノキ科 — ヒノキ(植栽)。

双子葉植物【離弁花類】

ドクダミ科 — ドクダミ

センリョウ科 — ヒトリシズカ、フタリシズカ。

ヤナギ科 — シバヤナギ、ヤマナラシ、パッコヤナギ。

クルミ科 — サワグルミ、オニグルミ。

カバノキ科 — ヤマハンノキ、ケヤマハンノキ、アカシデ、クマシデ、サワシバ、ツノハンバミ、シラカシバ(植栽)、イヌシデ、オオバヤシバシ。

ブナ科 — イヌブナ、シラカシ、アラカシ、コナラ、クリ。

ニレ科 — ケヤキ。

クワ科 — ヤマグワ、コウゾ、カナムグラ。

イラクサ科 — クサコアカソ、クサマオ、コアカソ、カラムシ、メヤブマオ、ムラゴイラクサ。

ウマノスズクサ科 — カンアオイ、オオバウマノスズクサ。

タデ科 — スイバ、ミズヒキ、ミヤマタニソバ、ギンギン、エゾノギンギン、イタドリ、タニソバ。

ヒユ科 — イノコズチ。

ナデシコ科 — ミドリハコベ、ミミナグサ、カワラナデシコ。

フサザクラ科 — フサザクラ。

キンボウゲ科 — コボタンズル、センニンソウ、アキカラマツ、ヤマトリカブト、サラシナシヨウマ、イヌシヨウマ、オオバシヨウマ、トウゴクサバノオ、ウマノアシガタ、キツネノボタン、クサボタン、フジセンニンソウ、ヤマオダマキ、キクザキイチゲ、ハンシヨウズル。

アケビ科 — アケビ、ミツバアケビ。

メギ科 — メギ。

ツツラフジ科 — カミエビ。

モクレン科 — ホオノキ。

クスノキ科 — ダンコウバイ、クロモジ、ヤマコウバイ、アブラチャン。

ケシ科 — クサノオウ、タケニグサ、ムラサキケマン、ミヤマキケマン。

アブラナ科 — ヤマハタザオ。

ベンケイソウ科 — コモチマンネングサ。

ユキノシタ科 — アカシヨウマ、ユキノシタ、ヤマネコノメソウ、クサアジサイ、タマアジサイ、コアジサイ、ガクウツギ、バイカウツギ、ヒメウツギ、マルバウツギ、ウツギ、イワガラミ、ギンバイソウ、ヤマアジサイ。

マンサク科 — マンサク。

バラ科 — コゴメウツギ、ヤマブキ、ヘビイチゴ、ミツバツチグリ、ニガイチゴ、クマイチゴ、モミジイチゴ、クサイチゴ、バライチゴ、キンミズヒキ、ヒメキンミズヒキ、ノイバラ、テリハノイバラ、ヤマザクラ、カスミザクラ、ソメイヨシノ(植栽)、カマツカ、クサボケ、ヤマテリハノイバラ、ナワシロイチゴ、シモツケソウ、ウラジロノキ、カナウツギ、ミツモトソウ、ズミ、アズキナン、エビガライチゴ、シモツケ、マメザクラ。

マメ科 — フジキ、キハギ、ヤブハギ、カラスノエンドウ、スズメノエンドウ、カスマグサ、ナンテンハギ、クズ、コマツナギ、フジ、シロツメクサ、アカツメクサ、ネムノキ、ネコハギ、マルバハギ、ヤブハギ、ヌスビトハギ、カワラケツメイ、カワチハギ、トキリマメ、イヌエンジュ、イタチササゲ。

フウロソウ科 — ゲンノシヨウコ。

カタバミ科 — カタバミ、ミヤマカタバミ。

ミカン科 — イヌザンシヨウ、マツカゼソウ、サンシヨウ、ミヤマシキミ。

ヒメハギ科 — ヒメハギ。

トウダイグサ科 — シラキ、ナツトウダイ、タカトウダイ、アカメガシワ。

ウルシ科 — ヤマウルシ、ツタウルシ、ヌルデ。

モチノキ科 — アオハダ。

ニシキギ科 — ツリバナ、ツルウメモドキ、マユミ、ニシキギ、コマユミ、サワダツ。

ミツバウツギ科 — ミツバウツギ。

カエデ科 — イロハモミジ、オオモミジ、エンコウカエデ、イタヤカエデ、チドリノキ、ウリカエデ、ウリハダカエデ、ホソエカエデ、メグスリノキ、ウラゲ

エンコウカエデ、コハウチワカエデ。

アワブキ科 — アワブキ。

クロウメモドキ科 — クマヤナギ、ケンボナシ。

ブドウ科 — ノブドウ、ヤマブドウ、ツタ、ヤブガラシ、エビヅル、サンカクヅル。

シナノキ科 — シナノキ、カラスノゴマ。

マタタビ科 — サルナシ、マタタビ。

ツバキ科 — ヒサカキ。

オトギリソウ科 — コオトギリ、オトギリソウ、トモエソウ。

スミレ科 — エイザンスミレ、アオイスミレ、ケマルバスミレ、ナガバノスミレサイシン、アカネスミレ、ヒナスミレ、タチツボスミレ、エゾノタチツボスミレ、オカスミレ、ヒゴスミレ。

キブシ科 — キブシ。

グミ科 — ナツグミ、マメグミ、ツルグミ。

ウリノキ科 — ウリノキ。

アカバナ科 — タニタデ、ミズタマソウ。

ウコギ科 — タラノキ、ウド、キヅタ、ヤマウコギ、ハリギリ。

セリ科 — ミツバ、ウマノミツバ、タニミツバ、ノダケ、シラネセンキュウ、ヤマゼリ、シジウド、セリ、ヤブジラミ、チドメグサ、ノチドメ、ヤマチドメ。

ミズキ科 — ハナイカダ、ミズキ、クマノミズキ、ヤマボウシ、アオキ。

【合弁花類】

リョウブ科 — リョウブ。

イチヤクソウ科 — イチヤクソウ。

ツツジ科 — バイカツツジ、ヤマツツジ、ミツバツツジ、アセビ、トウゴクミツバツツジ、スノキ。

ヤブコウジ科 — ヤブコウジ。

サクラソウ科 — オカトラノオ。

ハイノキ科 — タンナサワフタギ。

エゴノキ科 — ハクウンボク、オオバアサガラ、エゴノキ。

モクセイ科 — イボタノキ、コバノトネリコ、ミヤマイボタ、アラゲアオダモ。

リンドウ科 — リンドウ、センブリ。

キョウチクトウ科 — テイカカズラ。

ガガイモ科 — タチガシワ、コカモメヅル、イケマ。

ヒルガオ科 — ネナツカズラ。

クマツヅラ科 — ムラサキキンキブ、ヤブムラサキ、クサギ。

シソ科 — キランソウ、ウツボグサ、カキドオシ、イストウバナ、クルマバナ、テンニンソウ、ヤマハッカ、イヌヤマハッカ、タツナミソウ、アキノタムラソウ、シモバシラ。

ナス科 — イガホウズキ、ヒヨドリジョウゴ。

ゴマノハグサ科 — タチイヌノフグリ、オオイヌノフグリ。

ハエドクソウ科 — ハエドクソウ。

オオバコ科 — オオバコ。

アカネ科 — アカネ、ヤエムグラ、ヨツバムグラ、ヘクソカズラ、ヤマムグラ。

スイカズラ科 — スイカズラ、ヤブデマリ、ガマズミ、コバノガマズミ、ツクバネウツギ、ウグイスカグラ、ケウツギ、ニシキウツギ、ニワトコ。

マツムシソウ科 — マツムシソウ。

オミナエシ科 — ツルカノコソウ、オミナエシ、オトコエシ。

キキョウ科 — ツリガネニンジン、ソバナ、キキョウ、フクシマジャシオン、ヤマホタルブクロ、シラゲシヤシオン、ツルニンジン。

キク科 — ハルノノゲシ、オニノゲシ、オニタビラコ、ヤクシソウ、ニガナ、オオジシバリ、ジシバリ、コウゾリナ、セイヨウタンポポ、カントウタンポポ、コウヤボウキ、ナガバノコウヤボウキ、カシワバハグマ、センボンヤリ、セイタカトウヒレン、キツネアザミ、オヤマボクチ、ノアザミ、モミジガサ、ヤブレガサ、ヨモギ、リュウノウギク、ユウガギク、フキ、ノコンギク、サジガクビソウ、ガクビソウ、ハハコグサ、ヤハズハハコ、ハルジオン、ヒメジョオン、ヤナギバヒメジョオン、シラヤマギク、ヤマシロギク、ヒヨドリバナ、ヨツバヒヨドリ、サワヒヨドリ、タイアザミ、コヤブタバコ、フクオウソウ、ハバヤマボクチ、キオン、タムラソウ、オケラ、ホソバガクビソウ、トネアザミ、キバナガクビソウ、ヤマニガナ、ヤマタイミンガサ、ダンドボロギク、ウスユキソウ、アキノキリンソウ、ムラサキニガナ。

単子葉植物

イネ科 — イヌビエ、ウラハグサ、チカラシバ、カゼクサ、エノコログサ、トボシガラ、メヒシバ、オヒシバ、スズメノカタビラ、イチゴツナギ、ヒメノガリヤス、スズタケ、ミヤコザサ、ミヤマクマザサ、アズマネザサ、チガヤ、キンエノコロ、アブラススキ、オオアブラススキ、タチネズミガヤ、ノガリヤス、チヂミザサ、コブナグサ、スズメノヒエ、カリヤスモドキ、ヤマアワ、ススキ、ヤマカモジグサ、コチヂミザサ。

カヤツリグサ科 — ナキリスゲ、コカンスゲ、ヤマオオイトスゲ、ケスゲ、カンスゲ、ヒメカンスゲ、タガネソウ。

サトイモ科 — ホソバテンナンショウ、ミミガタテンナンショウ。

ツククサ科 — ツククサ。

イゲサ科 — スズメノヤリ、クサイ。

ユリ科 — オオバギボウシ、コバノギボウシ、ヤマユリ、ヤマホトトギス、ホトトギス、サルトリイバラ、ジャノヒゲ、ツクバネソウ、ノカンゾウ、ミヤマナルコユリ、ユキザサ、ホウチャクソウ、チゴユリ、アマドコロ、シオデ、ヤブラン、ツルボ、オオバジャノヒゲ、ナルコユリ、コオニユリ、ウバユリ、ヤマガシユウ、ミヤマナルコユリ、ヒメヤブラン。

ヒガンバナ科 — キツネノカミソリ、ヒガンバナ。

ヤマメイモ科 — ヤマノイモ、オニドコロ、キクバドコロ、ヒメドコロ、タチドコロ。

ラン科 — シュンラン、エビネ、ジガバチソウ、サバギラン。

(城川 四郎)

トリカブト属の関東地方産の種並びに異名

- Genus *Aconitum* L. N. : -Nakai
- 1) *A. deflexum* N. ヤマトリカブト (エンコウブシ) 本州中部
A. hakonense N. ハコネトリカブト (箱根)
A. osense N. オゼトリカブト (尾瀬)
A. kobusiense N. コブシトリカブト (甲武信岳)
A. tasiromontanum N. タシロヤマトリカブト (田代山・尾瀬)
 - 2) *A. tukubense* N. ツクバトリカブト (筑波山) 1) の異名とする説あり。
 - 3) *A. ibukiense* N. イブキトリカブト 本州中部, 近畿
A. oyamense N. オオヤマブシ (大山)
A. unguiculatum N. タンザワトリカブト (丹沢山)
A. hakonense N. = *A. ibukiense* N. var. *hakonense* Tamura
 - 4) *A. japonicum* Thunb. オクトリカブト (ヤマトリカブト) 中部地方以北, 北海道
A. subcuneatum N. オクトリカブト
A. zuccarinii N. = 10) アイズトリカブト
A. mitakense N. = 6) ミタケウズ
A. hondoense N.
A. aizuense N. キタヤマブシ
 - 5) *A. komatsui* N. ナンタイブシ 関東北部, 中部地方東部
A. membranaceum N.
 - 6) *A. mitakense* N. ミタケウズ 奥多摩御岳山
 - 7) *A. hakusanense* N. ハクサントリカブト 中部・東北の裏日本側の高山, 亜高山帯
A. nipponicum N. ミヤマトリカブト
 - 8) *A. tonense* N. ex Hara ジョウシュウトリカブト 関東北部
 - 9) *A. senanense* N. ホソバトリカブト 中部, 関東の高山 (本州中部以北)
A. villiferum N. カリコミブシ (日光刈込)
 - 10) *A. zuccarinii* N. アイズトリカブト (シラカワブシ) 山形, 福島, 北関東
 - 11) *A. meta-japonicum* N. オンタケブシ 中部地方以北
A. hisauchii N. ケミタケブシ (御岳山)
A. okuyamae N.
A. iwatekense N.
 - 12) *A. sanyoense* N. サンヨウブシ (トウカイブシ) 関東, 中部以西, 四国
A. titibuense N. チチブトリカブト (秩父)
 - 13) *A. suspensum* N. ミョウギトリカブト (妙義山)
 - 14) *A. grossedentatum* N. カワチブシ 関東, 中部地方太平洋側, 近畿, 西国
A. maruyamae N. ヤビツブシ (丹沢山)
 - 15) *A. parahakonense* N. イヌハコネトリカブト (関東)
A. fujipedis N.

(長谷川 義人)

[註] トリカブト属は外部形態が似ているため大変分類が難しく, 本県からも丹沢や箱根からタンザワトリカブト, ヤブツブシ, ハコネトリカブトなどいくつか新種が報告されています。この類の検討は今後の植物誌調査の大きな課題の一つです。

植物誌の文献コーナー

本号より新しく神奈川県植物誌に関する文献コーナーの欄を設けることにしました。これは1958年発行の神奈川県植物誌 (神奈川県教育委員会発行) 以降のものを扱う予定ですが, それ以前のものでも植物誌の文献欄に落ちているものが新たに発見されたらそれも収録の予定です。校友会誌, 同好会誌, 学会誌, 研究集録, 単行本, 新聞などに掲載されている記事や写真を順序不同で紹介し, 植物誌完結のときにまとめた

と思っています。どんな小さな記事でも結構ですから目にとまったら原稿にして下さい。なおできれば紹介記事とあわせて一部 (コピーでも可) 事務局までお送りいただきたく存じます。書き方は著者名, 表題名, 雑誌名 (または書名), 巻, 号, ページ, 発行年月日, 発行所の順で記し, 簡単な内容の紹介をして下さい。ただし新聞の場合はその新聞名と発行年月日だけで結構です。

◎仕入栄二・雨宮博之・小野友治・八木馨：さがみはらの自然環境調査研究。研究集録第44集1-81, 昭和53年6月13日発行。相模原市教育研究所。

この調査は昭和51・52年の2カ年間に行なった相模原市の植物を中心とした自然環境調査の研究成果である。この報告書の半分は自生植物と帰化植物のリストで占められ、自生植物596種、帰化植物108種が確認されている。ほかに植物群落の概要、帰化植物の概要、珍しい植物、類似植物の見分け方、教材に利用できる植物、植物観察コースの項目で解説文がある。珍しい植物を拾って見ると、アマナ、ウマノズクサ、オノノヤガラ、カナウツギ、クマガイソウ、タコノアシ、ナガバノスミレサイシン、ハグロソウ、ハナイカダ、ハバヤマボクチ、フッキソウ、ミヤマキケマン、リンドウなどがある。

◎御所見直好：鎌倉路の百花譜 — 野生の花の風土記 昭和55年9月25日発行。共立出版 ¥4,300

鎌倉に野生する草と木の花・148種を季節を追ってカラー写真で紹介し、末尾に種類の解説ページがある。植物写真は図鑑的なものから景観的にとらえたものなどさまざまであるが、一貫して背景は鎌倉であることを強調している。その意味から往時の鎌倉をしのぶ貴重な記録写真であり、鎌倉からすでに消滅したとかあるいは個体数が少なくなった植物も多く含まれている。一例をあげると、マツバラシ、シラン、ムラサキ、ミシマサイコ、オンタケブシ、センブリ、スハマソウなどが見受けられる。

◎高橋秀男：神奈川県のスミレ 神奈川県自然誌資料1号, 29-37頁, 1980年3月31日発行。神奈川県立博物館。

神奈川県産のスミレ24種を県立博物館と東大、科博、牧野標本館の標本にもとずきリストを作製したものである。

◎小原敬：ヴィーチと神奈川県植物 1 神奈川県自然誌資料1号, 93-96頁, 1980年3月31日発行。神奈川県立博物館。

神奈川の植物研究史を科学的に解明するには幕末から明治にいたる先駆的な外人研究者の業績を調べずしては語れない。本報もその一つで神奈川県産植物に先鞭をつけた陰の功労者ともいえるヴィーチ(1839-1870)の業績を紹介するものである。

医師オールコックが1959年6月に初代駐日公使として来日し、その在任3カ年の記録を著書「大君の都」にあらわした。オールコックは執筆に際して、農業や植物については当時日本へ植物の新種をさがしに来ていたヴィーチの助けを借りた。オールコックの著書の巻末にはヴィーチが作成した「日本の農業・植物に関する覚え書」が収録されているが、これが神奈川県産植物と密接な関係にある。本報は今までわが国の学者が余り関心の払うことのなかったヴィーチの人物や彼が作成した植物リストについて言及する。(高橋秀男)

◎沢田武太郎：沢田武太郎植物日記 昭和54年3月31日発行(解説編と索引は同年6月16日発行)。箱根町教育委員会

沢田武太郎氏は箱根底倉の旅館「つたや」の主人で

あったが、東大経済学部在学中より牧野富太郎、次いで中井猛之進に師事して箱根の植物、特に樹木について深く研究し、ハコネラン、ハコネメダケ、ハコネアザミなどの学名にその名を残している。氏は昭和13年12月、40才の若さで逝去されたが箱根植物の研究に忘れることのできない大きな足跡を残された。沢田武太郎氏の箱根植物研究の最盛期と思われる頃の日記をそのままの姿で復刻し、その解説と索引の3冊をもって一冊に収めたのが表記の沢田武太郎植物日記である。その期間は1926年5月29日より1936年5月21日に及ぶ。内容は箱根各地の植物調査の記録で、略地図、植物のスケッチを多く伴う。ハコネラン発見のいきさつなど興味深い記事が多い。略地図入りの箱根植物探索の記事は今日誠に貴重な記録である。またこの時期は日本の植物分類学の黄金時代であり、中井猛之進博士を中心とする植物分類学者達との交渉の記録も意義が深い。

この書の成るのには箱根町助役の信濃一男氏と沢田武太郎氏の令弟秀三郎氏の力による。特に沢田秀三郎氏は多大の努力をもって本書の解説編を取りまとめられた。苦心の解説篇と本篇とを併せ見る時その意義は明らかである。

沢田武太郎氏は学名の考証に深い興味を有し、中井博士の要請もあって欧米の古典籍を数多く収集された。このコレクションは戦後神奈川県に帰し、神奈川県立博物館に移管された。これは極めて質の高い蒐集集であって、今日これと同等のものを収集しようとしてもほとんど不可能であろう。我々は日頃その恩恵に浴している。先にその極めて不十分な目録を刊行したが、近い将来に完全な目録をまとめたいと考えている。

沢田武太郎氏は通常の2倍大の極めて優れた植物標本を作成された。その大部分は東大に収められたと聞くが若干の残部が神奈川県立博物館に将来されてある。誠に立派な標本である。(大場 達之)

第7回 植物研究講座

日 時：12月13日(土) 13時30分～15時30分

テ マ：マメ科植物2・3の形質と分類

講 師：玉川大学農学部客員教授 許建昌先生

場 所：県立博物館講堂

募集人員：80名(定員を超過した場合は抽選)

対 象：高校生以上一般

申込方法：往復ハガキに住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、〒231 横浜市中区南仲通り5-60 神奈川県立博物館学芸部「植物研究講座」係へお申込み下さい。

申込期間：11月1日(土)から11月30日(日)まで
(上記期間外の申込みは受付ません)

(註)この講座は博物館の行事として行うものです。

博物館から特別展のご案内

○10月25日(土)～11月23日(日) 職人の道具

○1月31日(土)～2月22日(土) 神奈川の100人

○3月3日(火)～3月29日(土) 地中海気候の花
— 硬葉樹林帯の植物—